

一月四日

久し振りに地下室に降りた。何処か展覧会に出展して戻った世田谷村の模型が壁に吊してあったのを降ろし、積もったホコリをふき取る。夕方、NHKに持ち込む。十七時車で渋谷NHKへ。十七時半着。十九時半まで打ち合わせ。二〇時世田谷に戻る。

一月五日

五時二〇分起床。五〇分車で発。六時十五分NHK着。まだ約束の時間まで間がある。七時リハーサルの後八時三五分放送開始。九時五五分迄おしゃべりした。TVもまた楽しからずや。十時半研究室。何人か学生が出ていた。十一時M1修士設計エスキス見る。十二時千代田さん夫妻来室。コンビ二を閉じたので、その転用の相談。千代田さんは埼玉の地主さんで一度六軒の建売住宅の計画をした事がある。十三時過研究室を発ち取材へ。千歳船橋にて中里和人と待ち合わせ。藤井誠二宅。鈴木隆之設計の激安五百万円ハウス訪問。十六時過迄。十七時半世田谷村に戻る。藤井さんの家は土地を除けば年収よりも安価な家であるところが良い。アウトノミア運動的なインパクトを持ち得る素材になっているのだが、その社会性を鈴木隆之君はまだ直接に充分表現していないと感じた。もっと建築に集中しないと。マアこれは他人には言えず、自分も言われそうだな。鈴木君はこの五百万円ハウスを持って、日本近代の謂わゆる最小限住宅の様々な試みを総批判したら

良い。それが、如何に余りにも建築的な試行であって、現実の社会の住宅問題と遊離したものであったかを、彼は今なら書けるのに。惜しい。難波和彦の箱の家のルーツは池辺陽ではなくて、増沢旬の最小限住宅ではないかと私はいらんでいる。それでなくては箱を主題として掲げる意味がない。池辺陽のNOシリーズの住宅には謂わゆる建築的な空間の質は無い。厳密に言えば視覚的な表れをする建築的価値は乏しい。難波和彦の住宅には池辺には無かった空間が、拡がりとして表われる事がある。箱を主題にしたセキスイ・ハイム・オリジナルの企画者であった大野勝彦には空間というニュアンスは皆無であった。難波和彦は、その空間らしき拡がりを残滓の如く引きずっている。増沢旬に生田勉を混ぜたような感じだ。その点、鈴木隆之の五百万円ハウスには何処にも空間らしきはない。空間なんて言ってられぬ位にその内部の拡がりには要するに狭い。逼迫している。その内部の拡がり、言ってしまうれば隙間だ。その隙間に人間が棲もうとしているところが面白い。都市にキレッツが生じて、そのキレッツが隙間にまで押し拡げられる。鈴木はキレッツを見つけた藤井を助けて、要するにそのキレッツを隙間にまで押し拡げたのだ。このキレッツみたいな現代に特有の場所の認識は難波には少ないように思う。それ故、難波は生産的概念のシステムを言い続けるのだろう。

一月七日

昨日は午後三ノ輪の藤井さんの土地検分。都市のド真中の土地で研究室で今抱えている仕事の中では一番都市性の濃いサイトだった。幸脇さんから住宅に相談のお手紙いただく。